

8 いつも隣の列のほうが早く進むわけ

隣の芝生はいつだって青く

あちらのほうが日当たりもいい

歌
ペトラ・クラーク

空港や郵便局で列に並ぶと、決まってほかの列のほうが早く進むように感じるものだ。渋滞している高速道路では、決まって隣の車線のほうが自分のいる車線より早く進むように見える。そちらの車線に変更したら、今度はそちらが遅くなる。よく、「ソッドの法則」「遅かれ早かれ、必ず最悪の状況が起こる」というもので、「マーフィーの法則」とも言う」と呼ばれるが、こうした状況は、現実の根底ではとことん意に反する原理が働いていることを表しているらしい。あるいは、自分だけが損をしているかと思いたがったり、偏った証拠だけを選んで心に留めてしまったりといった、人間の傾向を表しているだけかもしれない。私たちは、たまたま何かに符合することを深く心に刻み、そういう符合がなくてわざわざ心に留めようとはしないものは、数としてはもっと多くても、あらためて思い起こそうとはしないものだ。それでも、遅い列に並んでいるような気がしょっちゅうするのは、錯覚などではないかもしれない。平均するとたいていは本¹当に遅い列に並んでいるという事実があるからこそ、そう思うのだ。

理由は簡単。遅い列や車線は、平均すると、ほかより多くの人や車がいる列や車線だ。だから、ほか

より人が少なくて早く進んでいく列や車線よりも、遅い列や車線のほうにいる確率のほうが高くなる。

ここでは、「平均すると」という条件が重要だ。どんな列にも、財布を忘れた人とか、時速五〇キロ以上は出せない車とか、一般とはちがった事情があるものだ。いつもいちばん遅い列に並んでいるとはかぎらないが、自分が並ぶすべての列を考慮に入れて平均すると、ふつうより混んでいる列に並んでいる可能性が高くなるだろうし、たいていの人がそうなる。

この種の自動淘汰^{セルフ・セレクション}「自然に一定の結果が集まってしまう現象」は、とくにそれがあると気づかない場合には、科学やデータ分析に広く影響をおよぼすことがある、典型的な偏りとなる。たとえば、教会に定期的に通う人は、そうでない人よりも健康かどうかを決めたいとする。ここには、避けなければならぬ落とし穴がある。健康状態がひどく悪い人たちは教会に行けないだろうから、教会に集まった人の頭数を数えるだけで人々の健康状態を示そうとすると、誤った結果を導くことになる。これと同じように、宇宙に目を向けるとき、コペルニクスから広まった、宇宙における自分たちの位置を特別なものと考えてはならないという「原則」が頭に浮かぶかもしれない。ただ、私たちの位置があらゆる点において特別だと期待すべきではないにしても、いかなる点においても特別であるはずがないと考えるのは大きなまちがいだろう。生命が存在しうるのは、特別な条件が整っている場所だけかもしれない。生命が見つかる可能性がいちばん高いのは、恒星や惑星があるところだ。恒星や惑星といった構造物は、材料となる多量の塵^{ちり}が平均よりもたくさんある場所で形成される。そういうわけで、科学をするときや、データを相手にするときには、帰結について、証拠からどれかひとつの帰結が優先的に導かれるように誘導する偏りがなく、まずそこを問うのが肝心ということになる。